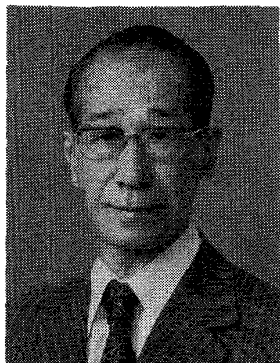


随 想

鉄 と ス ラ グ

松 下 幸 雄*



“そうだ、主題を書きわすれた。LD 転炉の「ノロ」処理だ”。これは、昭和 48 年新春のお年賀の返礼で筆者が故金森九郎先生から頂いたお手紙の 1 部である。多くの会員が直ぐお気付きのように、それは *Trans. ISIJ*, 13 (1973) 4, p. 255 掲載の “**Safe Disposal of Molten LD Converter Slag Using Rapidly Rotating Roller**” に先生の発想が明確に示されている。

筆者は収集癖を持ち合わせないので、失礼とは思いつつ大抵のものは、用が終つたら直ぐ捨ててしまう。大変不思議なことに、この随想執筆の依頼を受けて間もなく、引出しを片付けていたらそのお手紙が出てきた。捨て忘れたのでなく、クリップで止めてあつたので何か意識してのことであつたろう。実は、随想を書くには余り気が進まないで弱つていた。前回の随想経験は、昭和 46 年の第 5 号で、当時は編集委員長であつたし、たまたまその号が“圧延用ロールの材質と寿命”特集第 1 号であつたので話の種には困らず、また義務感もあつた。ともかく、弱つていたところに幸いこのお手紙の発見であつた。

金森九郎先生がその論文を欧文誌に寄稿された時、筆者はすでに編集委員長の任期を終えていたので、直接のかかわり合いは何もなかつた。ただ、4 葉のカラー写真（これは投稿者が負担する）とか、査読、英文校閲などの過程で間接的にご相談に与つただけである。一言ここで書いておきたいのは、先生が担当委員と協会編集課に大変感謝しておられたことである（当然のことながら担当委員は公表されていないが）。

先生の御霊や当時の関係者には失礼とは思いつつ、編集当局にお願いして、そのお手紙の 1 部を差支えない限りでそのまま複製してある。“金森が又乱棒なこと…”というのは、いうまでもなくラテライト鉚処理にかかわる高炉湯溜吹精のことである。“真似上手な日本のこと…”は、金森理論である。筆者がもつとも感銘を受けたのは、“鉄について何一つ云う資格(?)はない…”のくだりである。

私事にわたつて恐縮ながら、33 年前筆者は海軍短期現役技術士官を解放され、敗戦とともに当時の東京大学第二工学部に戻つた。その時、最終勤務地の海軍航空技術廠から国有財産はそのまま 1 部西千葉キャンパス（現在では東京大学生産技術研究所千葉実験所になつている）に頂いて、混迷のさなか何が何でも研究に打込みたかった。ご停年が近付いた故吉川晴十先生の下に金森九郎先生が日鉄から着任され、何時とはなしに筆者は鉄冶金学講座の所属となつた。何かの契機でスラグの研究をテーマに若い情熱を燃やし、はじめて本誌に投稿したのが、田坂鋼二君と共著の“熔融鋼滓の電気化学的研究”で、昭和 22 年 1~3 号に掲載して頂いた。ご年配の方々をよく知つておられるように、昭和 20 年という年は休刊状態で、戦後の復刊は昭和 21 年 1~3 号の B5 版（戦前は A4 版）、粗悪な用紙で 20 頁そこそこのお粗末な雑誌であつた。当時の協会関係者のご辛酸には頭が下がる思いであるが、幼稚な論文でも自分達の研究成果が活字になって実に嬉しかつた。

高度経済成長が終りを告げ、社会経済情勢が激しく変化するとともに、良質の鉄をつくる反面スラグ処理と有効利用は社会通念となつてきた。“スラグ・コントロール”を心の支柱として筆者も研究を続けていたと思うが、それは冶金的に良質の鉄をつくるためだけのことであつた。実は、もつと広い視点で

* 本会副会長 東京大学工学部 工博

